小郡市指定有形文化財

旧松崎旅籠油屋２

－福岡県小郡市松崎所在遺跡の調査報告－

小郡市文化財調査報告書第３１７集

２０１８

小郡市教育委員会

小郡市指定有形文化財

旧松崎旅籠油屋２

－福岡県小郡市松崎所在遺跡の調査報告－

小郡市文化財調査報告書第３１７集

２０１８

小郡市教育委員会

序文

本書は、小郡市指定有形文化財である旧松崎旅籠油屋の発掘調査報告書です。調査は、小郡市松崎地内における浄化槽設置、油屋解体・復原業務に先立って、小郡市教育委員会が平成24年度から29年度にかけて実施しました。

本報告書では、油屋の解体時に実施した発掘調査成果を中心に、これまで実施した試掘調査を含め、油屋の全体像を明らかにしました。

旧松崎旅籠油屋は、平成3年の台風によって屋根が破損したことから、地元住民を中心とした保存活動が始まり、平成7年には油屋復原の陳情書が市に提出されました。この陳情書の提出から19年の歳月がかかりましたが、平成26年には中油屋が復原され、平成30年度には油屋も復原が完了します。これらが地域住民のみならず、多くの方々にとって松崎宿の旅籠を体感できる施設として、市民と来訪者の交流の場、さらには、まちづくりの拠点として活用されることを願ってやみません。

最後となりましたが、発掘調査を進めるに際して、地元松崎区の皆様、現地作業にあたった作業員の皆様を始め、多くの方々にご理解とご協力をいただいたことに厚くお礼申し上げ、序文といたします。

平成30年3月30日

小郡市教育委員会
教育長　清武 輝

例言

1．本書は、平成21年度に実施された浄化槽設置工事、平成24年度から26年度にかけて実施した中油屋解体復原業務、平成27年度から30年度にかけて実施している油屋解体復原業務に先立って、小郡市教育委員会が実施した旧松崎旅籠油屋の試掘調査・発掘調査の記録である。
2．旧松崎旅籠油屋2の試掘調査・発掘調査は、小郡市松崎786-1、786-2の計303㎡において実施した。
3．遺構の実測については、5次試掘調査は坂井貴志、5次調査から9次調査は片岡宏二が行った。なお、5次調査は今村杏奈の補助、一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託している。6・7次調査は上田恵の補助、8次調査は龍孝明の補助、9次調査は上田、龍、一木賢人の補助を得た。製図は龍、宮崎美穂子が行い、一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
4．遺構の写真は各年度で担当者が撮影し、遺物写真撮影は有限会社システム・レコに委託した。
5．遺物実測は阿南祥吾（現下関市教育委員会）、久住愛子、近藤可奈、龍が行ない、製図は久住愛子が行った。
6．遺構図中の方位は座標北を示し、全体図中の座標は世界測地系第Ⅱ系による。
7．遺物、実測図、写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
8．本書の執筆は龍が行った。

＜本文目次＞

序文
例言

第１章　調査の経過と組織……1

第２章　位置と環境……3

第３章　遺構と遺物……8
　１．５次調査（試掘）……8
　　１）土坑
　２．５次調査……9
　　１）胞衣埋納遺構
　　２）溝
　　３）その他の遺構
　３．６次調査……11
　　１）トレンチ
　　２）土坑
　　３）胞衣埋納遺構
　　４）溝
　４．７次調査……16
　　１）溝
　　２）その他の遺構
　５．８次調査……17
　　１）トレンチ
　６．９次調査……19
　　１）トレンチ
　　２）カマド

第４章　まとめ……30
　１．油屋
　２．中油屋

＜挿図目次＞

第１図　周辺遺跡分布図・調査区配置図（S=1/25,000・1/2,500）
第２図　油屋礎石配置図（S=1/150）
第３図　油屋調査区配置図（S=1/150）
第４図　５次調査（試掘）全体図・土層図（S=1/40）

第５図　５・６次調査区全体図（S=1/80）
第６図　５次調査区土層図（S=1/40）
第７図　１～３、５・６号胞衣埋納遺構実測図（S=1/10）
第８図　７次調査区全体図（S=1/40）
第９図　８・９次調査区全体図（S=1/100）
第 10 図　９次調査区土層図・断面図（S=1/60）
第 11 図　ろ－三～十列土層図（S=1/60）
第 12 図　又に十、ち七実測図（S=1/60）
第 13 図　旧松崎旅籠油屋出土陶器・磁器実測図（S=1/4）
第 14 図　旧松崎旅籠油屋出土磁器実測図（S=1/4）
第 15 図　旧松崎旅籠油屋出土磁器・土師器実測図（S=1/4）
第 16 図　旧松崎旅籠油屋出土持送拓本（S=1/4）
第 17 図　旧松崎旅籠油屋出土持送拓本（S=1/4）
第 18 図　油屋変遷図

＜表目次＞

第１表　旧松崎旅籠油屋発掘調査一覧
第２表　遺物観察表

＜図版目次＞

図版１
１．５次調査区　全景
２．１号胞衣壺出土状況
３．２号胞衣壺出土状況
４．３号胞衣壺出土状況
５．６次調査区　全景
６．６次調査　門付近礎石
図版２
１．４号胞衣壺出土状況
２．５号胞衣壺出土状況
３．７次調査　北側な列
４．７次調査　西側塀下
５．７次調査　門礎石
６．７次調査　東布石
図版３
１．９次調査区　全景（西から）
２．９次調査区　全景（東から）
図版４
１．９次調査　１トレンチ
２．９次調査　７トレンチ
３．９次調査　７トレンチ
４．９次調査　８トレンチ
５．９次調査　９トレンチ
６．９次調査　ろ列
図版５
１．９次調査　か十六付近雨落
２．９次調査　へ十四
３．９次調査　ち七
４．９次調査　ち七礎石地形
５．９次調査　又に十
６．９次調査　又に十礎石地形
図版６　出土遺物
図版７　出土遺物
図版８　出土遺物
図版９　出土遺物
図版 10　出土遺物

第１章　調査の経過と組織

旧松崎旅籠油屋の確認調査は、平成12年度、平成16～18年度にかけて４次にわたり実施されており、『旧松崎旅籠油屋』として2008年に報告書が刊行されている。今回は平成21～28年度にかけて実施した試掘調査を含めた５～９次調査の報告である。９次調査の主要な調査箇所については国庫補助により実施し、事前・追加調査箇所は油屋解体・復原業務に伴って実施したものである。各次調査の期間および面積については報告書抄録にまとめている。ここでは、調査の概要と各年度の調査体制について述べ、各調査の詳細については第３章に詳述する。なお、平成21年度に試掘調査として５次調査を実施しているが、平成24年度も調査担当者の確認ミスにより５次調査としてしまった。混乱を避けるため、平成21年度調査分を５次調査（試掘）とし、平成24年度分を５次調査として報告する。

＜平成 21 年度：５次調査（試掘）＞
（概要）浄化槽設置に伴う試掘調査
2009 年５月 25 日～６月９日
小郡市教育委員会　教育長　清武　輝
教育部　部　長　赤川芳春
文化財課　課　長　田竜千代太
係　長　片岡宏二
嘱　託　坂井貴志

＜平成 24 年度：５次調査＞
（概要）中油屋確認調査
2012 年 12 月 19 日～12 月 27 日
小郡市教育委員会　教育長　清武　輝
教育部　部　長　吉浦大志博
文化財課　課　長　片岡宏二
（調査担当）
係　長　柏原孝俊

＜平成 25 年度：６次調査＞
（概要）中油屋確認調査
2013 年８月 23 日～12 月 25 日
小郡市教育委員会　教育長　清武　輝
教育部　部　長　佐藤秀行
文化財課　課　長　片岡宏二
（調査担当）
係　長　柏原孝俊

＜平成 26 年度：７次調査＞
（概要）中油屋西側塀および門の調査
2014 年９月 26 日～10 月 14 日
小郡市教育委員会　教育長　清武　輝
教育部　部　長　佐藤秀行
文化財課　課　長　片岡宏二
係　長　柏原孝俊
技　師　上田　恵

＜平成 27 年度：８次調査＞
（概要）試掘調査
2015 年 12 月 17 日～12 月 18 日
小郡市教育委員会　教育長　清武　輝
教育部　部　長　佐藤秀行
文化財課　課　長　片岡宏二
係　長　柏原孝俊
技　師　龍　孝明

＜平成 28 年度：９次調査＞
（概要）油屋調査
2016 年４月 18 日～2017 年２月 15 日
小郡市教育委員会　教育長　清武　輝
教育部　部　長　山下博文
文化財課　課　長　片岡宏二
（調査担当）
係　長　柏原孝俊

＜平成 29 年度＞
（概要）整理・報告書作成
小郡市教育委員会　教育長　清武　輝
教育部　部　長　山下博文
文化財課　課　長　柏原孝俊
係　長　杉本岳史
技　師　龍　孝明

年	内容
平成３年	台風により油屋屋根が破損 建物調査を実施
平成４年	地権者より建物の寄贈を受ける 屋根の修理を実施
平成６年	再度屋根の修理を実施
平成８年	九州芸術工科大学（現九州大学大学院　芸術工学研究院教授）宮本雅明教授による油屋調査 西日本文化協会福岡県地域史研究所時里泰明氏による資料調査
平成11年	瓦落下防止のための応急処置を実施
平成12年	油屋出入り口の一部補修を実施 宮本教授による油屋再調査 確認調査として１次調査を実施
平成13年	小郡市有形文化財として指定される
平成16年	旧松崎旅籠油屋保存整備基本計画書を策定 確認調査として２次調査を実施
平成17年	確認調査として３次調査を実施
平成18年	確認調査として４次調査を実施
平成21年	浄化槽設置に先立つ５次調査（試掘）を実施
平成24年	中油屋復原に先立つ５次調査を実施
平成25年	中油屋復原に先立つ６次調査を実施
平成26年	中油屋復原に先立つ７次調査を実施 中油屋復原完了
平成27年	油屋解体に伴う８次調査を実施
平成28年	油屋復原に先立つ９次調査を実施
平成29年	カマド位置を検出・確認
平成31年	油屋復原完了予定

第１表　旧松崎旅籠油屋の調査経過一覧

第２章　位置と環境

福岡県は九州本島の北部に位置し、関門海峡を隔てて本州西端に隣接する。周防灘・響灘・玄界灘・有明海の４つの海に面し、それぞれ瀬戸内海、日本海、東シナ海へとつながることから、古代より日本と大陸とを結ぶ行政、交通の要衝であった。現在の県域は明治９年（1876）に福岡・三潴・小倉三県の合併により成立した。小郡市は、福岡県の中央部、筑後平野の北端付近に位置している。古来から筑前と筑後、肥前を結ぶ交通の要衝であり、文化的にも重要な位置にあたる。市の北西部から西部にかけては、背振山系から派生する丘陵が連なり、三国丘陵と呼ばれる。地質は花崗岩風化土で浸食されやすいため、各所に雨水などによる浸食で谷部が形成されている。市内中央部付近を筑後川の支流である宝満川が南北に貫流しており、多くの小河川がこれに流れ込んでいる。これら河川によって形成された広大な平野部が市の東・南部に形成されている。

歴史的環境のうち中世以前は他の報告書に詳しいため、ここでは割愛し、近世以降の小郡について中心に述べる。

豊臣秀吉による天正15年（1587）の九州仕置により、筑後川以北の御原郡、御井郡は、豊臣氏の蔵入地となった。文禄４年（1595）には筑前名島城城主小早川秀俊に加増されたが、慶長５年（1600）関ヶ原の戦で備前国岡山へと加増、転封されたことにより、田中吉政の所領となる。しかし、元和２年（1620）二代田中忠政のとき断絶し、翌年有馬豊氏が入国し、明治維新まで支配することとなる。

交通の面に目を向けると、参勤交代道が発達し、小倉と長崎を結ぶ長崎街道、筑前山家から分岐して松崎宿、府中宿、羽犬塚宿、瀬高宿を通り鹿児島へ至る薩摩街道が主要街道であった。「筑後国変地其外相改目録控」には正保３（1644）年の国絵図記載内容に見る在郷町のなかに小郡町や井上町とともに横隈町の名がみられる。横隈は久留米城下から筑前へと通じる往還「横隈街道、筑前海道」であり、宿場町が形成されていた。承応２（1653）年には町屋の老朽化のために、家作に精をいれるようにと３ヵ年の地子免除などが許されている。

寛文13（1673）年、二代久留米藩主有馬忠頼の養子である有馬豊範は、寛文８年（1668）から貞享元年（1684）まで御原郡内松崎藩（19ヶ村１万石）を分知されたことをきっかけに、松崎に居館を構え、松崎宿の整備とともに、松崎宿を通る松崎街道の開設を計り、延宝６（1678）年に松崎街道が開通した。これにより、それまで主要道として機能していた横隈町の宿駅は廃止されることとなった。横隈町の名は元禄８（1696）年、宝永年間（1704～1710）に記された啓忘録にはみられないことから、松崎町、長崎街道の成立に伴い、在郷町としての機能低下を示しているのであろう。横隈宿の南端に接する力武町口という小字名はこの名残であろうか。

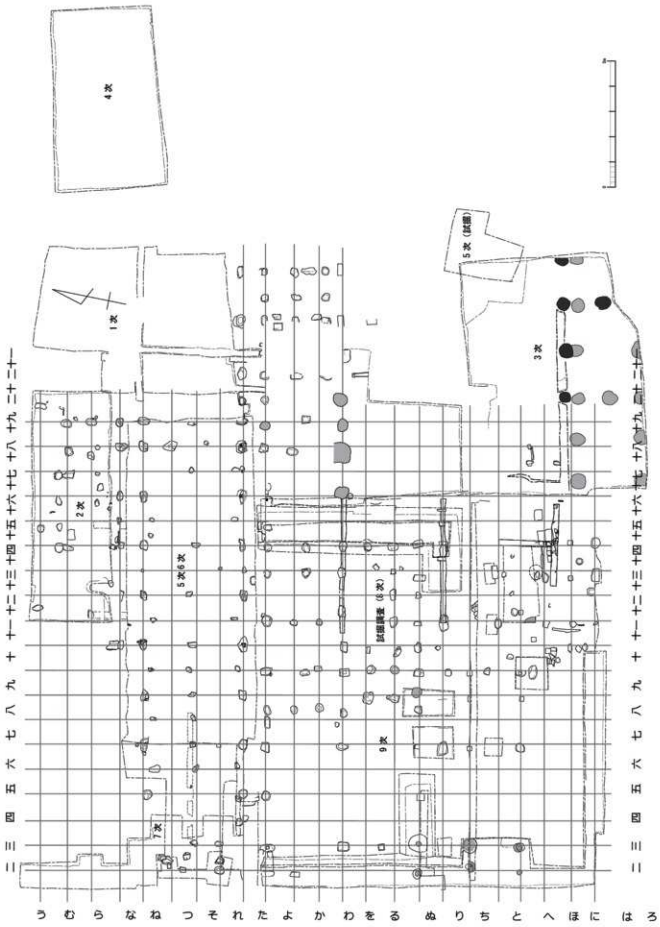
有馬豊範改易により、貞享元年（1684年）に松崎藩は取り潰され、一時幕府領となるが、元禄10年（1697）久留米藩に返還された。松崎宿は薩摩街道の宿場町として重視され、繁栄した。

松崎町は宿場町として発展し、慶応２（1866）年の記録によると、本陣を含めて旅籠が26軒あり、町の総軒数は129軒にも及んだ。松崎宿には南北構口の石垣が残る。

参考文献

佐藤雄史 2008『旧松崎旅籠油屋』小郡市文化財発掘調査報告書第234集

第１図　周辺遺跡分布図（S=1/25000）



第２図　油屋礎石配置図（S=1/150）

第３図　油屋１～９次調査区配置図（S=1/150）

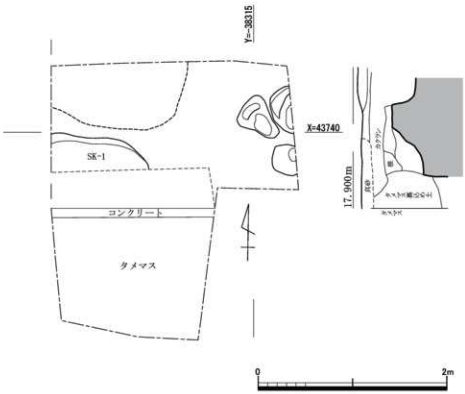
第３章　遺構と遺物

１.５次調査（試掘）の遺構と遺物

浄化槽設置に先立ち、平成21年（2009）５月25日～６月９日にかけて、試掘調査を実施している。検出された遺構は、土坑１基、ピット３基、３次調査で検出されたタメマスの東側延長部にあたる。

１）土坑（SK）（第４図）

ＳＫ－１は、タメマスの裏込めにより切られる。検出面からの深さは最大で30cmを測る。埋土は単層で、磁器片、瓦片が出土している。上面が攪乱を受けているため、どの面から掘削されているか不明である。出土遺物は無い。



第４図　５次調査（試掘）全体図・土層図（S=1/40）

２．５次調査の遺構と遺物

平成24年度に中油屋式台構口部分の確認調査を実施した。検出した遺構は中油屋礎石、雨落溝、タタキである。ただし、遺構平面図にはレベルの記載がなく、断面図は中途で終わっているため、調査区の全容および詳細は明らかでない。

検出された礎石からは、上面に柱芯位置を示す「＋」字が墨書されているもの、文字が書かれたものが確認できた。

土層断面図（第６図）を見てみると、第１層は黒褐色砂質土で礎石下の根石を安定させるためのものと考えられる。第２層はタタキで、第３層もタタキである。第１層の掘り込みが切っており、礎石配置前のタタキの可能性がある。第10層は、灰色ロームのブロックを含む黒色土で、固く締まる。床下の整地層と考えられる。第８、９層はタタキの下にあたることから、整地層と考えられる。第11、12層も同様であろう

１）溝（第５図）

調査区東側で検出された鉤状に延びる溝である。幅30～110cm以上を測るが、連続せず、不明瞭である。削平を受けている可能性がある。雨落溝の可能性が考えられるが、西側は判然とせず、積極的に肯定できない。

２）土間（第６図）

土間のタタキは第６図に示す第２層が該当する。厚さ10～18cmを測る。黄褐色土と黒色土のブロックが混ざり、硬くしまる。タタキの下には、硬く締まる灰褐色砂質土による整地がなされる。第３層が該当する。砂質土であることから湿気抜きの役割が考えられる。

３）胞衣埋納遺構（第５・７図）

土間で検出された４基の胞衣埋納遺構である。１点ずつ土瓶が出土した。土瓶内部には有機物の付着が見られ、出土状況と内容物から胞衣壺として利用されたものと考えられる。

１号胞衣埋納遺構（第７図　図版１－１）

平面プランは楕円形状を呈し、長軸31cm、短軸23.5cmを測る。埋土はしまりのないわずかにロームを含む暗黄褐色砂質土の単層である。１号胞衣壺が出土した。

２号胞衣埋納遺構（第７図　図版１－３）

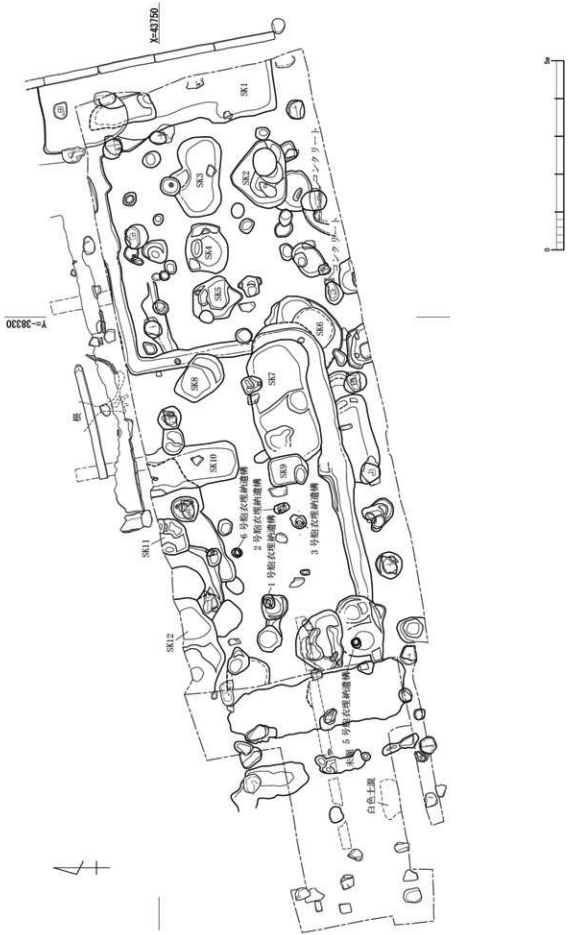
平面プランは楕円形状を呈し、長軸33cm、短軸19.5cmを測る。埋土は１号胞衣埋納遺構と似ており単層である。２号胞衣壺が出土した。

３号胞衣埋納遺構（第７図　図版１－４）

平面プランは不整円形状を呈し、径54～60cmを測る。一部が北東側に張り出す。断面図無し。埋土は１号胞衣埋納遺構と似ており単層である。３号胞衣壺が出土した。

４号胞衣埋納遺構（第７図　図版２－１）

４号胞衣壺が出土した。埋土は注記がなく、不明である。



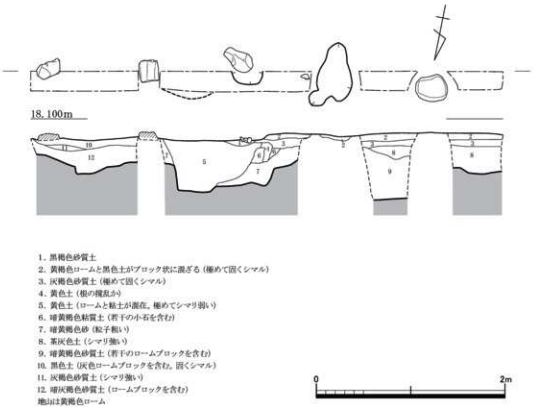
第５図　５・６次調査区全体図（S=1/80）

4）その他の遺構（第５・６図）

土間整地以前の掘り込みが土層上で確認されている。第４～７層が該当する。未検出のため平面プランは不明である。土層からは複数回の掘り込みが行われたと考えられる。周囲で確認されている廃棄土坑であろうか。第５層は、しまりが無く、すぐ崩れる状態であった。黄色土とローム、粘土が混在し、地山の土をそのまま掘りあげたような土質であった。

５次調査の出土遺物（第13～15図）

11～19は陶器土瓶およびその蓋である。いずれも釉は青緑色を呈す。11は蓋で、最大径9.3cm、口径6.7cm、器高3.8cmを測る。外面施釉で端部は釉が薄い。12は土瓶である。口径9.2cm、底径8.2cm、体部最大径20.0cm、器高12.8cmを測る。器形は算盤玉状を呈し、体部外面はヘラケズリ後施釉。内面は肩部付近まで釉がかかるが、底部は露胎する。底部は上げ底となる。注口は体部に外面から３点の穿孔後、接合する。吊手は隅丸三角形状を呈し、指オサエにより接合する。外面は青緑色の釉がかかり、体部下半は釉剥ぎで露胎する。また、内部には胎盤と考えられる有機物が付着する。13は蓋で、最大径8.6cm、口径6.6cm、器高2.9cmを測る。外面施釉、内面は露胎する。14は土瓶である。口径8.0cm、底径7.8cm、体部最大径17.7cm、器高11.6cmを測る。体部は丸みを帯び、口縁部はやや内面に傾いた平坦面をなす。体部最大径付近まで施釉、下半は釉剥ぎにより露胎する。底部はケズリで上げ底になる。注口は直線的にのび、体部に径５mm前後の３点の穿孔後接合する。吊手は隅丸三角形状を呈し、指オサエにより接合する。内部には有機物の付着が見られる。15は蓋である。最大径9.8cm、口径7.7cm、器高3.8cmを測る。外面施釉で内面露胎する。16は土瓶である。口径9.4cm、体部最大径18.6cm、底径7.4cm、器高12.6cmを測る。体部は丸みをおび、口縁端部は水平面をなす。外面施釉で、腰付近まで厚く釉がかかる。底部は露胎し上げ底となる。注口はやや歪みながら直線的にのび、体部に径７mm前後の３点穿孔後接合する。吊手は端整な隅丸三角形状を呈し、外面はカキメによる条痕を施す。体部整形後指オサエによる接合。内部には有機物が付着する。17は、磁器蓋である。口径6.3cm、最大径8.5cm、器高2.5cmを測る。身と口径が合わないことから、転用品と考えられる。外面に青、赤、緑、黄緑の４色を用い、草花文を描く。つまみは赤色顔料で塗られる。内面に「馱知村　北□□（窯か）」の刻印が見られる。18は土瓶である。口径9.5cm、体部最大径20.4cm、底部径8.5cm、器高13.5cmを測る。釉は濃青緑色で、外面体部下半および内面肩部以下は白土による化粧が施される。



第６図　５次調査区土層図（S=1/40）

３．６次調査の遺構と遺物

中油屋の設計変更に伴い、平成25年度に中油屋の西側の塀および門の確認を行った。調査時に一部５次調査と記載しているため、混乱を生じている。また、「中油屋南側桁行トレンチ」等、中油屋設計に合わせたトレンチ名称に設定しているが、図面上にはトレンチ位置および名称は記されていない。

検出された遺構は土坑12基、溝1条、複数のピット、礎石である。

１）土坑（第５図）

１号土坑

調査区東端で検出した平面プラン長方形の土坑である。東側は調査区外へと続くため、全容は明らかでない。現況での最大幅1.10m、遺構検出面からの深さは最大で96cmを測る。遺構上面に礎石があることから、中油屋創建以前、礎石配置前の掘り込みである。出土遺物の時期幅があるが、17世紀代の所産と考えられる。

２号土坑

調査区南東側で検出した隅丸三角形状の土坑である。複数の遺構に切られる。出土遺物無し。

３号土坑

２号土坑の北側で検出した。平面プラン不整長方形を呈する。長軸1.68m、短軸1.04mを測り、北側に

テラスをもつ。深さは検出面から20cm程度と浅い。上面で礎石が検出されていることから、中油屋創建前の遺構と考えられる。出土遺物は青磁碗１点であるが、小片のため図化できていない。

４号土坑

３号土坑の西側で検出した。平面プラン円形の土坑である。径88 ～ 100cmを測る。深さは検出面から最大で20cmと浅い。出土遺物無し。

５号土坑

４号土坑の西側で検出した。平面プラン不整円形の土坑である。規模は径90 ～ 104cm、検出面からの深さは最大で20cmと浅い。出土遺物無し。

６号土坑

７号土坑に切られる。未完掘。出土遺物無し。

７号土坑

６号土坑、１号溝を切る。９号土坑に切られる。平面プラン隅丸長方形で長軸2.60m、短軸1.25m、検出面からの深さは最大で38cmを測る。東半分はテラス状を呈し、西側より2cm程度高い。上面で礎石を検出していることから、中油屋創建以前の遺構である。出土遺物から18世紀中頃の所産と考えられる。

８号土坑

７号土坑の北側で検出した。１号溝を切る。平面プラン楕円形で長軸110cm、短軸80cmを測る。検出面からの深さは最大で30cmを測る。出土遺物無し。

９号土坑

７号土坑を切る。平面プラン隅丸長方形を呈する。長軸82cm、短軸66cm、検出面からの深さは最大で61cmを測る。出土遺物無し。

10号土坑

９号土坑の北側で検出した。平面プラン長方形で北側は調査区外へとのびる。幅89cm、長さは現況で1.87m、深さは検出面から最大で26cmを測る。上面から礎石が検出されたが、当初から動いたものであり、時期不明である。

11号土坑

調査区北端、10号土坑の西側で検出した。北側は調査区外へとのびる。幅76cmを測る。出土遺物に17世紀前半代のものが含まれる。

12号土坑

調査区南西端で検出した。２基の土坑の切り合いであろうか。

13号土坑

出土遺物に13号土坑のラベルが入っていた。しかしながら、遺構の位置は図示されておらず不明である。磁器猪口が１点出土しているが現代のものであり、図化していない。

２）溝（第５図）

１号溝

調査区東側で検出した。７号土坑に切られる。１号土坑との切り合い関係は不明である。最大幅34cm、検出面からの深さは３～ 11cmで、床面はほぼ水平である。建物配置と軸が揃っており、建物と

関連する可能性が考えられる。7号土坑南側から西へのびる同規模の溝があるが、1号溝との関係は不明である。ただし、底面の標高は一致している。出土遺物からは、18世紀前半代の所産と考えられる。

3）トレンチ

第1、第2トレンチの地点は不明である。ただし、第2トレンチは、ね列で調査を実施しているが、詳細な位置は不明である。

「七」列トレンチ（第3トレンチ）

2ヵ所に南北に並ぶ礎石を検出した。中油屋の中心軸と合っていることから、中油屋の「門」本柱の可能性を考慮し、東側を拡張した。控え礎石が見られないことから、この礎石が控え柱の礎石である可能性がある。

4）胞衣埋納遺構

5号胞衣埋納遺構（第7図　図版2－2）

平面プランは径19～22cmを測る隅丸方形のピット状を呈する。上面は削平される。5号胞衣壺が出土した。

6号胞衣埋納遺構（第7図）

平面プラン円形で19～21cmを測る。上面は削平を受ける。6号胞衣壺が出土した。ただし、遺物は7号土坑出土遺物と接合したもので、積極的に胞衣埋納遺構と肯定できない。

6次調査の出土遺物（第13～15図）

1、2、5、8，9は土坑から出土した。

9は陶器甕である。口径は22～23cm程度となろうか。口縁部は体部から内側に湾曲しながらのびる。外面はヘラ状工具による沈線が5条巡る。内面は粗い格子目のタタキと回転ナデである。外面鉄釉で一部黄釉が粗くかかる。黄釉は内面にもかかるが、一部未溶融である。8と同一のものと考えられ、傾き、調整から器高20cm程になると考えられる。8は陶器甕で、9と同一品と考えられるが接合しない。復元底部径16.8cm、復元胴部最大径23.6cmを測る。内面は白土による化粧が施される。

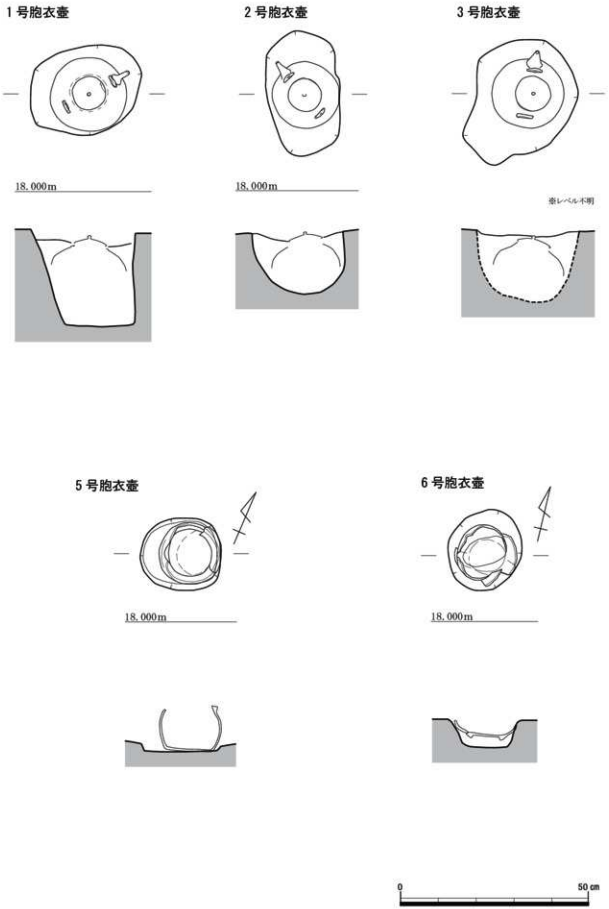
21は磁器碗で、復元口径8.6cm、復原高台径3.6cm、器高5.0cmを測る。全体にやや青味がかっており、外面に竹および草花文が描かれる。

58は土師器蓋、59は土師器壺、60は土師器皿である。いずれも5号胞衣埋納遺構から出土した。58は59の蓋で、やや歪みがあるが、口径14.6～15.0cmを測る。59は口径12.9cm、器高11.1cmを測る。内面底部に有機物が付着していた。

1、47は7号土坑から出土した。1は陶器碗である。口径10.6cm、高台径4.9cm、器高5.9cmを測る。外面にやや粗雑な草花文を描き、内外面に乳緑色の吹きつけたような釉がまだらにかかる。17世紀後半以降。47は青磁皿で、高台径9.3cmを測る。高台は蛇ノ目釉剥ぎで凹形高台である。18世紀中頃か。2、40、51は10号土坑から出土した。2は陶器碗で、復元口径13.4cmを測る。40は磁器小坏で、復元口径6.6cm、高台径2.6cm、器高4.5cmを測る。畳付き内側に砂が付着しており、砂目積みによる焼成と考えられる。

17世紀中頃。５は11号土坑から出土した陶器皿で、高台径5.0cmを測る。内外面ともに淡黄釉がかかり、見込みは蛇ノ目釉剥ぎで赤褐色を呈する。見込みと畳付き内側に砂が付着する。砂目積による焼成である。1610 ～ 1650年代。10は12号土坑から出土した陶器鉢である。復元口径40.0cm、高台径13.2cm、器高13.3cmを測る。外面上半は鉄釉で下半は露胎する。内面は白土による波状文、横刷毛による装飾が施される。見込み付近に銅緑釉がかかる。1690 ～ 1750年頃。

61は１号溝から出土した土師器皿である。底部は上げ底となっている。口縁端部に煤が付着していることから、灯明皿であろうか。25は磁器碗である。1700 ～ 40年代。



第７図　１～３・５、６号胞衣埋納遺構実測図（S=1/10）

４．７次調査の遺構と遺物

７次調査では、中油屋の入口部分の調査を実施した。検出された遺構は区画溝と考えられる溝１条とピットである。調査日誌には区画溝１、２と記載があるが、平面図上に遺構番号は記されていない。溝は調査区西側を南北に縦貫する１条のみであるため、これを区画溝として報告する。ただし、１、２の別は明らかでないため、同一遺構として報告する。

１）溝

区画溝１（第８図）

調査区西端で検出された溝である。検出された礎石より後出する。一部が陸橋状となっていることから、中油屋の入り口である可能性が考えられる。また、敷地の西端を南北に走ることから、敷地の区画溝の性格が考えられる。

７次調査の出土遺物（第13～15図）

３はＰ２中部から出土した陶器碗である。高台内に刻印があるが、判読できない。24は区画溝１南部から出土した磁器碗で、復元口径10.6cmを測る。48は表土層から出土した磁器皿である。復元口径20.0cm、極めて発色の悪い草花文と圏線が描かれる。口縁部に歪みが見られるため、輪花皿の可能性がある。

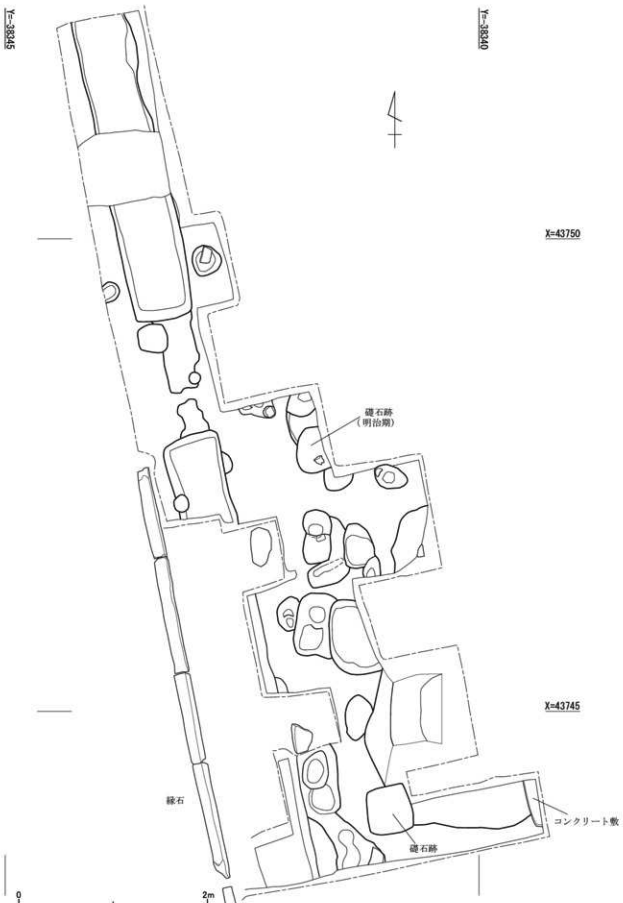
５．８次調査の遺構と遺物

８次調査は、油屋解体中に遺構面までの深さ、礎石の抜き取り痕の有無、雨落ち溝の確認を行う目的で３本のトレンチ調査を実施している。

１）トレンチ（第９図）

１トレンチ

礎石抜取り痕を検出する目的で設定したトレンチである。現代土間のタタキを除去し、遺構検出を行った。検出された遺構はを・十二～十六列の礎石抜取り痕及びその地形である。東側では雨落溝を検出した。雨落溝は径５cm前後の玉石が敷き詰められる。



第８図　７次調査区全体図（S=1/40）

２トレンチ

ち・十二～十六列礎石抜取り痕を検出する目的で設定したトレンチである。現代土間のタタキを除去し、遺構検出を行った。検出された遺構は礎石抜取り痕およびその地形である。

３トレンチ

カマド跡を検出する目的で南北○m、東西○mのT字形に設定したトレンチである。現代土間のタタキを除去し、遺構検出を行った。検出された遺構は、モルタルの土間と考えられ、後世の改変を受けている。一部炭や焼土が混入しており、カマドに起因するものと考えられる。検出には至らなかったものの、カマドの存在が想定された。

８次調査の出土遺物

30は、発掘調査に伴う出土遺物ではないが、油屋解体調査着手直前に油屋２階濡縁の下、切目貼下に置かれていた絵付青磁碗蓋である。約1/2が残存する。復元口径12.3cm、器高4.1cm、ツマミ復元径5.4cm。外面は飛び鉋状の施文が６条巡る。施釉後、赤色顔料を用いてモミジを描く。1850 ～ 60年代。

発見された地点は、建築後に手を加えた可能性が低いため、油屋建築時に置かれたものと考えられる。なお、油屋の建築時期は、解体時に発見された墨書より文久元年～４年（1861 ～ 1865）頃と考えられ、時期的な齟齬はない。

５．９次調査の遺構と遺物

油屋主屋の全域を調査している。後世の攪乱が多く、また、復原建物は基礎補強部分以外に掘削を伴わないことから、現状保存ができる範囲は調査を行なわず、遺跡が破壊される箇所のみ調査を実施した。なお、基礎補強部分が拡幅されたため、追加調査を実施した。

１）トレンチ（第９図　図版４・５）

各トレンチの状況を見ていく。調査時には、柱の廻り番付に従いトレンチ位置を表記しているが、実際と異なっている箇所もある。ここでは、調査時のトレンチ表記をそのまま採用し、間違いのあるものは、本文中に実際の位置を表記する。なお、出土遺物のラベルと遺構番号が異なっているものもあり、出土地点不明の遺物、表土中の遺物については、トレンチ出土遺物として一括して報告する。

トレンチろ～よ・二

建物西壁に位置する。入口部分の礎石と礎石跡を検出した。縁下部分は未掘である。

トレンチろ・二～十（第11図）

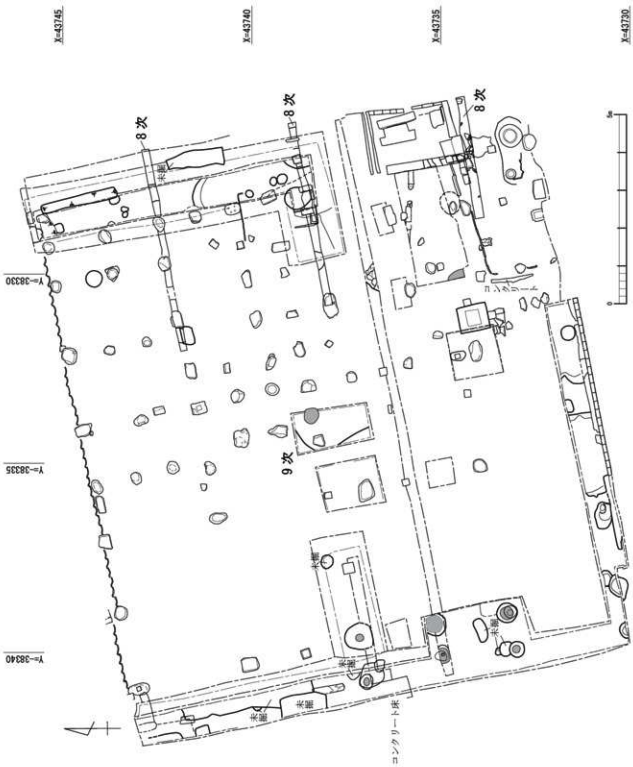
建物南壁の西側に位置する。礎石跡および土壙状の掘り込みを検出した。

トレンチち～よ・十六

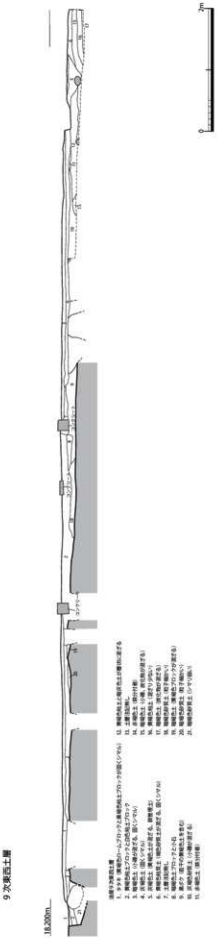
建物の東側縁下に位置する。一部攪乱を受けている。

トレンチほ・十二～十四

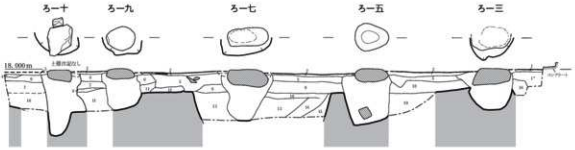
土間控柱部分の掘削を行なったが、礎石跡は検出されなかった。ただし、大正屋敷方向に延びる鉄管が検出されており、大正期の大規模改修の際に鉄管の埋設が行われたようである。延長方向から、東側は建物東へと延びると考えられるが、西側の接続箇所は不明である。



第９図　８・９次調査区全体図（S=1/100）



第 10 図　9次調査区土層図・断面図（S=1/60）



1．赤褐色粘土（平成に実施した修繕時のタタキ）
2．暗灰褐色砂質土（表土）
3．石表土（調査時に除去）
4．灰黄褐色粘土
5．暗黄褐色土（焼土、炭化物が混ざる）
6．暗褐色土（黄褐色粘土ブロックが混ざる）
7．暗黄褐色土（黒色土ブロックが混ざる）
8．暗灰褐色土（黄褐色粘土ブロックを含む）
9．黄褐色土（黄褐色ローム粒を多く含む）
10．暗褐色土（炭化物と焼土を多量に含む。シマリ弱い）
11．暗褐色土（粒子細かい）
12．暗黄褐色砂質土（黒色土が混ざる）
13．黄褐色ローム（黒色土、暗黄褐色土が混ざる。焼土を含む）
14．黄褐色ローム（若干の黒色土を含む）
15．暗黄褐色砂質土
16．土層注記無し
17．暗黄褐色土（黄褐色ブロックを多量に含む）
18．土層注記無し
19．土層注記無し
20．土層注記無し

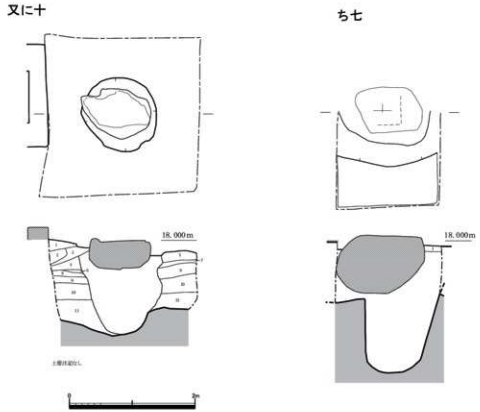
第 11 図　ろ－三～十列土層図（S=1/60）

トレンチ又に十（第12図　図版５－５）

実際には、に～ほ・十地点に該当する。土間と台所を仕切る壁の柱礎石を検出した。

トレンチち七（第12図　図版５－３）

大階段に接する大黒柱の礎石を検出した。



第 12 図　又に十・ち七実測図（S=1/60）

トレンチは十二～十四

カマド位置確定のため、再検出を行っている。その結果、カマド跡と考えられる硬化面と灰の掻き出し口と考えられるわずかな窪みを確認した。

９次調査の出土遺物（第13～15図）

４は陶器碗で、復元口径9.2cm。淡黄褐釉を施す。６は陶器皿で、砂目積である。７は陶器甕である。27、32、35、42、52、54、56は表土からの出土。いずれも磁器で小坏の比率が高い。27は内面口縁部に雷文を描く。42は砂目積で、見込に梅花文、外面には「三原吟□」と描かれる。56は猪口で、高台は蛇ノ目釉剥ぎを施す。砂目積。

33、34、36、37、41、46、55、57はカマド覆土からの出土である。小坏の比率が高い。33は外面に赤色顔料で草花文を描く。34は35に似る。36は見込に草花文を描き、口縁部内面にうろこ状の文様をめぐらせる。46は胎土目積。

29はヘ十四トレンチから出土した磁器碗蓋である。復元口径9.0cm、外面に草花文、内面口縁部に雷文をめぐらせる。38はヘ十二トレンチから出土した磁器小坏で、見込に花鳥文を描く。44はち七から出土した輪花皿で、復元口径9.0cm、復元高台径5.2cmを測る。

45は磁器輪花皿、復元高台径7.4cmを測る。見込に山水文を描く。高台内は蛇ノ目釉剥ぎで、胎土目積。53は磁器皿である。復元高台径5.0cmを測る。見込は蛇ノ目釉剥が施される。砂目積。

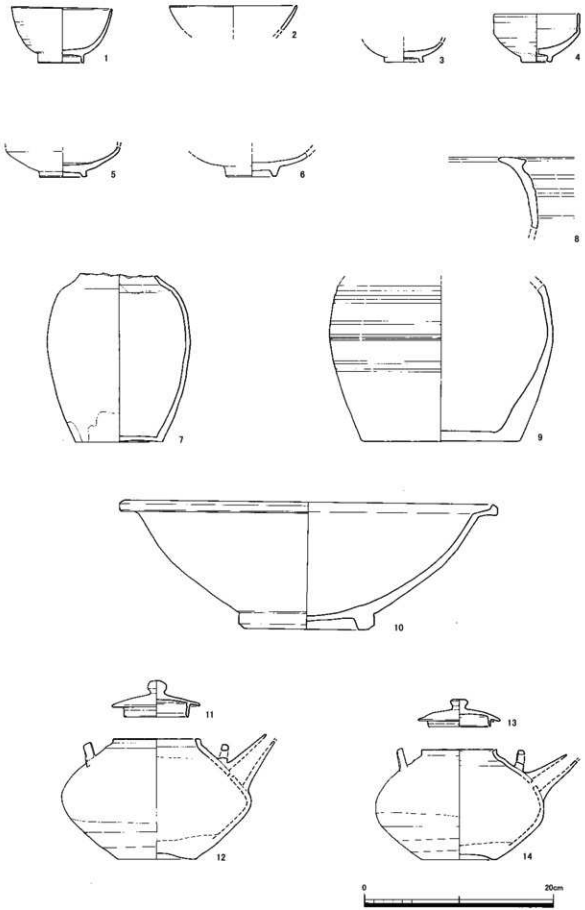
２）カマド

８、９次調査で検出に至らなかったカマド位置および範囲確認のため、調査完了後に検出作業のみ実施した。８次調査の際に、炭、焼土が見られた範囲および９次調査で得られた油屋復原案を基に、カマド位置が建物南東側、中央寄りの地点に推定されたため、精査を行った。

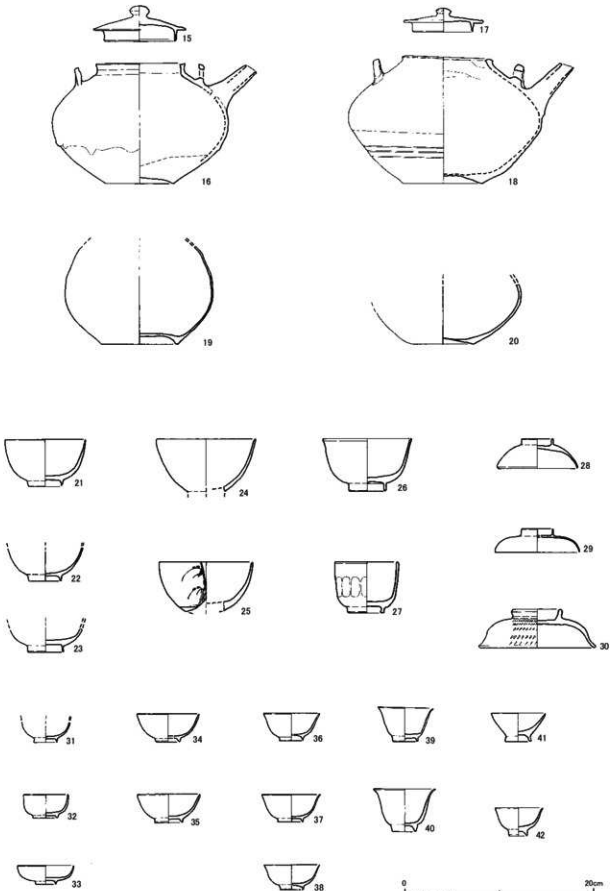
撹乱および瓦を埋設した排水溝によって切られているものの、部分的な硬化面を確認した。9次調査でも明らかであったが、遺構面は既に削平を受けており、遺存状況は悪い。硬化面は、幅20cm前後の弧状に巡っており、カマド壁体の設置箇所と考えられる。硬化面の内側からは、円形の極めて浅い掘り込みを検出した。上面が削平されているため、炭や焼土の出土は見られないが、カマドの燃焼部と考えられる。検出できた範囲はカマドの南側半分と考えられる。北側は近代以降の排水溝によって切られているが、礎石が位置することから、カマドは礎石までの範囲と想定できる。推定されるカマド規模は長軸120cm、短軸40cm、平面プラン楕円形を呈し、２～３口の焚口をもつと考えられる。

カマドの南側には直線状に延びる幅10cmを測る溝１条、溝の端部に接して径18cmを測るピット１基を検出した。溝は油屋の南壁と平行しており、クドと壁の間を仕切る衝立の存在が想定される。

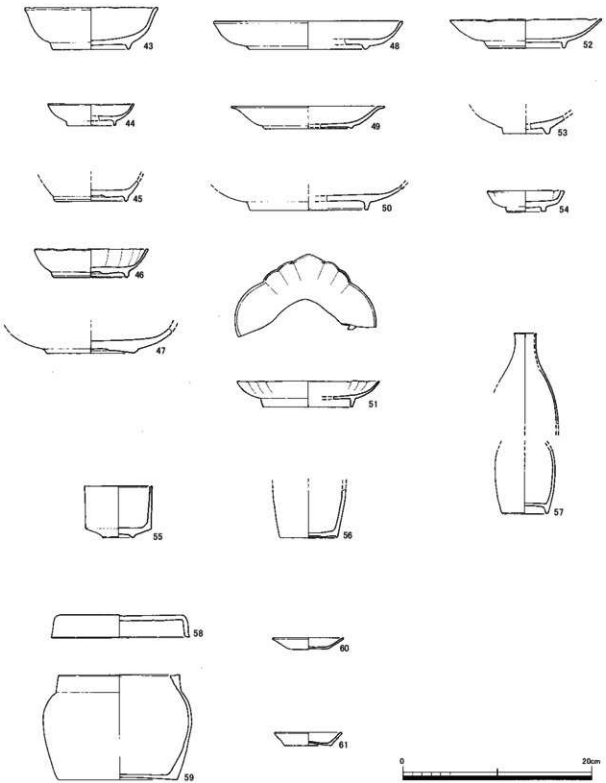
出土遺物無し。



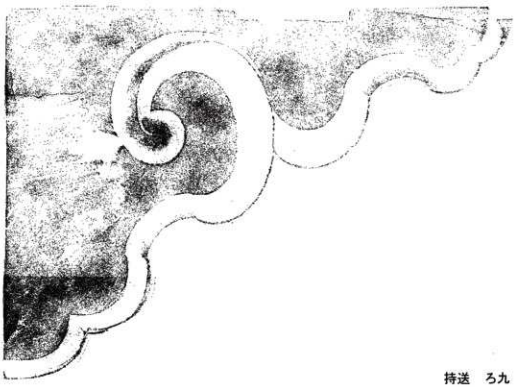
第13図　油屋出土陶器・磁器実測図（S=1/4）



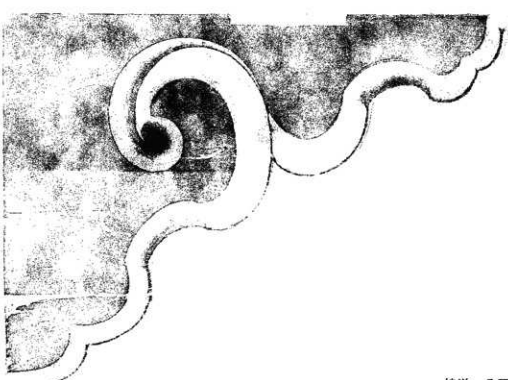
第 14 図　油屋出土磁器実測図（S=1/4）



第 15 図　油屋出土磁器・土師器実測図（S=1/4）

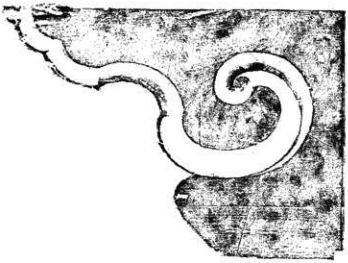


持送　ろ九

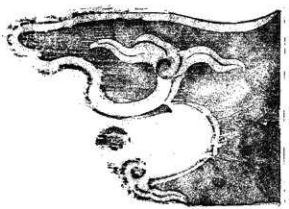


持送　ろ五

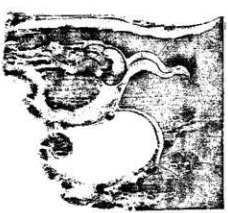
第 16 図　油屋持送拓本（S=1/4）



二階出窓持送　ろ三



二階下層　か二



二階下層　り二

第 17 図　油屋持送拓本（S=1/4）

出土土器観察表

器種：土：土師器、瓦：瓦質土器、陶：陶器、磁：磁器
法量＝口：口縁、高：器高、高台：高台径、ツ：ツマミ径、最：最大径
（　）は復元径・残存高

出土遺構	検出番号	図版番号	器種	法量cm（復元値）	色調・釉	胎土	焼成	成形・調整	備考
6次　7号土坑	第13図1	図版7 2	陶・磁	口：10.6 高：5.9 高台：4.9	乳緑色	精良	良好	回転ナデ	外面に梅鉢な草花文 外面の釉は吹きつけか
6次　10号土坑	第13図2	図版7 2	陶・磁	口：(13.4) 高台：－ 高：(2.6)	黄釉・褐釉	精良	良好	回転ナデ	口唇部に褐釉
7次　P 2中部	第13図3	図版9 4	陶・磁	口：－ 高台：4.2 高：(2.1)	淡黄褐釉	精良	良好	ロクロ水引	高台内に刻印あり 見込の文様は小片のため不明
9次　8トレンチ	第13図4	図版9 3	陶・磁	口：(9.2) 高台：(3.2) 高：5.1	淡黄褐釉	精良	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	高台は露胎
6次　11号土坑	第13図5	図版7 2	陶・皿	高：(3.1) 高台：5.0	淡黄釉	精良	良好	ロクロ水引	見込は蛇ノ目釉剥ぎ 見込、高台内面に砂目跡
9次　7トレンチ	第13図6	図版9 2	陶・皿	口：－ 高台：5.3 高：(2.5)	淡灰緑色釉	精良	良好	回転ナデ	砂目積
9次　10トレンチ	第13図7	図版－	陶・壺	口：－ 高台：(9.2) 高：(17.6)	褐釉	精良	良好	回転ナデ タタキ	内面胴部、外面底部は露胎
6次　1号土坑	第13図8	図版7 2	陶・壺	底：(16.8) 最：(23.6) 高：(16.5)	黄釉・褐釉	2mm以下の砂粒をわずかに含む	やや不良	回転ナデ 粗い格子目タタキ	9と同一だが、接合しない
6次　1号土坑	第13図9	図版7 2	陶・壺	口：－ 高：(7.5)	黄釉・褐釉	1mm以下の砂粒をわずかに含む	やや不良	回転ナデ 粗い格子目タタキ	内面に未溶融の釉付着
6次　12号土坑	第13図10	図版7 2	陶・鉢	口：(40.0) 高：13.3 高台：13.2	鉄釉 飴緑色釉	精良	良好	回転ナデ ハケメ	外面上半は鉄釉、下半は露胎 内面は白色土で刷毛目による装状文、横刷毛の装飾
5次　1号動衣埋納遺構	第13図11	図版－	陶・土瓶類	口：6.7 最：9.3 高：3.8	濃青緑色釉	精良	良好	回転ナデ ヘラケズリ	
5次　1号動衣埋納遺構	第13図12	図版－	陶・土瓶	口：9.2 高：12.8 底：8.2 最：20.0	白色化粧土 濃青緑色釉	精良	良好	ロクロ水引	内面底部に有機付着物（胎盤か）
5次　2号動衣埋納遺構	第13図13	図版－	陶・土瓶類	口：6.6 高：2.9 最：8.6	濃青緑色釉	精良	良好	ロクロ水引	
5次　2号動衣埋納遺構	第13図14	図版－	陶・土瓶	口：8.0 高：11.6 底：7.8 最：17.7	白色化粧土 濃青緑色釉	精良	良好	ロクロ水引	内面底部に有機付着物（胎盤か）
5次　3号動衣埋納遺構	第14図15	図版－	陶・土瓶類	口：7.7 高：3.8 最：9.8	濃青緑色釉	精良	良好	ロクロ水引	
5次　3号動衣埋納遺構	第14図16	図版－	陶・土瓶	口：9.4 高：12.6 底：7.4 最：18.7	白色化粧土 濃青緑色釉	精良	良好	ロクロ水引	内面底部に有機付着物（胎盤か）
5次　4号動衣埋納遺構	第14図17	図版61	陶・土瓶類	口：6.3 最：8.6 高：2.6	透明釉	精良	良好	回転ナデ	赤、青、緑、黄釉で草花文を描く 内面ツマミ裏に刻印
5次　4号動衣埋納遺構	第14図18	図版61	陶・土瓶	口：9.5 底：8.6 最：20.4 高：13.5	白色化粧土 濃青緑色釉	精良	良好	回転ナデ 掛オサエ	体部下半に工具による条痕
6次　6号動衣埋納遺構	第14図19	図版7 1	陶・土瓶	口：－ 高：(10.4) 底：8.2	外面：白色釉 内面：褐釉	精良	良好	ロクロ水引	胴部に円形の接合痕 7号土坑出土遺物と接合
6次　床下客土層中	第14図20	図版－	陶・土瓶	高：(6.3) 底：6.6 最：(16.6)	白色化粧土 濃青緑色釉	精良	良好	ロクロ水引	外面下半にスス付着 1～4号動衣盗と同型品
5次　1号土坑	第14図21	図版7 2	磁・陶	口：(8.6) 高：(3.6) 高台：5.0	やや青味がかる透明釉	精良	良好	ロクロ水引	畳付に砂目跡 竹が描かれる
6次　床下客土層中	第14図22	図版9 1・2	磁・陶	口：－ 高台：3.5 高：(3.5)	淡い乳緑色	精良	良好	ロクロ水引	高台内面に「大明年製」銘 内外面に細かい荒入が入る
6次　第1トレンチ	第14図23	図版7 3	磁・陶	口：－ 高台：3.9 高：(2.5)	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	見込に草花文 外面の文様不明

出土遺構		検出番号	図版番号	器種	法量cm（復元値）	色調・釉	胎土	焼成	成形・調整	備考
7次	区画溝1 南部	第14図24	図版－	碗・椀	口：(10.6) 高台：－ 高：(5.6)	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	
6次	1号溝	第14図25	図版－	碗・椀	口：(9.9) 高台：－ 高：(5.1)	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	外面に草花文
8次	第1トレンチ	第14図26	図版7 3	碗・椀	口：(9.4) 高：5.6 高台：(4.0)	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	外面に山水文か 内面口縁部に雲文 見込に1条の圏線
9次	南西側表土	第14図27	図版10 1	碗・椀	口：6.8 高台：4.0 高：5.4	透明釉	精良	良好	ロクロ水引 削ナデ	外面上位に唐草もしくは鳳与文 間オサエ部の文様不明 内面口縁部に雲文
6次	床下礎部面直上	第14図28	図版－	碗・壺	口：(8.6) 高：3.1 高台：(3.4)	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	
9次	へ十四トレ	第14図29	図版9 5・6	碗・鉢蓋	口：(9.0) ツ：(3.4) 高：2.5	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	外面に草花文 内面口縁部に雲文
8次	2階階板切目貼下	第14図30	図版10 2・3	碗・鉢蓋	口：(12.3) 高：4.1 高台：(5.4)	淡緑色釉	精良	良好	ロクロ水引 横ぴきケズリ	受付は露胎 外面に赤色顔料でモミジを描く
6次	第1トレンチ	第14図31	図版7 3	碗・小坏	口：－ 高台：3.5 高：(2.2)	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	見込に「大明年製」銘 高台内に「口に青」銘
9次	南西側表土	第14図32	図版10 1	碗・小坏	口：4.6 高台：2.5 高：2.5	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	内面口縁部露胎 外面に山水文
9次	1トレ カマド層土	第14図33	図版9 1	碗・小坏	口：6.0 高台：2.3 高：2.0	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	外面に赤色顔料で草花文を描く
9次	1トレ カマド層土	第14図34	図版9 1	碗・小坏	口：(6.6) 高台：(2.4) 高：3.0	灰白色釉	精良	良好	ロクロ水引	9次北東側表土No.1に似る
9次	北東側表土	第14図35	図版10 1	碗・小坏	口：6.7 高台：2.9 高：3.1	灰白色釉	精良	良好	回転ナデ	厚く釉がかかる
9次	1トレ カマド層土	第14図36	図版9 1	碗・小坏	口：(6.0) 高台：(2.4) 高：2.9	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	見込に草花文 内面口縁部にうろこ状の文様をめぐらせる
9次	1トレ カマド層土	第14図37	図版9 1	碗・小坏	口：(6.2) 高台：2.7 高：2.9	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	見込に山水文を描く
9次	へ十二トレ	第14図38	図版－	碗・小坏	口：(6.0) 高台：(2.6) 高：2.7	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	見込に花鳥文
6次	床下客土層中	第14図39	図版9 1	碗・小坏	口：5.9 高：3.6 高台：3.6	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	口縁部に歪みあり 高台内に砂付着
6次	10号土坑	第14図40	図版7 2	碗・小坏	口：(6.6) 高台：2.6 高：4.5	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	高台内面に砂目跡
9次	1トレ カマド層土	第14図41	図版9 1	碗・小坏	口：5.8 高台：2.8 高：3.0	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	外面に雲を浮った鶴と詩が描かれる
9次	南西側表土	第14図42	図版10 1	碗・小坏	口：5.2 高台：1.9 高：3.0	透明釉	精良	良好	型押しか	砂目跡 見込に梅花文 外面に「三窓外口」 梅花文が描かれる
6次	床下礎部面直上	第15図43	図版7 5・6	碗・輪花皿	口：(14.1) 高：4.6 高台：8.3	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	外面に唐草文1条 内面に草花文 高台内に窯あり
9次	ち7	第15図44	図版－	碗・輪花皿	口：(9.0) 高台：(5.2) 高：2.5	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	
9次	8トレンチ	第15図45	図版9 3	碗・輪花皿	口：－ 高台：(7.4) 高：(2.2)	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	高台内は蛇ノ目釉剥ぎ 見込に山水文を描く 胎土目積
9次	1トレ カマド層土	第15図46	図版9 1	碗・輪花皿	口：12.0 高台：7.6 高：3.6	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	高台内は蛇ノ目釉剥ぎ 見込に山水文を描く 胎土目積
6次	7号土坑	第15図47	図版7 2	青磁・皿	高：(2.0) 高台：9.3	青緑色	精良	良好	ロクロ水引	蛇ノ目釉剥ぎ 回部高台
7次	表土層	第15図48	図版－	碗・皿	口：(20.0) 高台：(12.4) 高：3.9	やや黄色味をおびる透明釉	精良	良好	ロクロ水引	極めて発色の悪い草花文と圏線 口縁部に歪みあり。輪花皿か

出土遺構	掲載番号	図版番号	器種	法量cm（口径/底径）	色調・釉	胎土	焼成	成形・調整	備考
6次　第1トレンチ	第15図49	図版73	碗・皿	口：(16.2) 高台：(9.4) 高：2.4	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	内面に山水文 口唇部に焼成前の割れあり
6次　床下敷下生活面直上	第15図50	図版74	碗・皿	口：— 高台：(12.4) 高：(2.4)	やや青味がかる透明釉	精良	良好	ロクロ水引	見込に葉が1枚描かれる
6次　10号土坑	第15図51	図版72	碗・輪花皿	口：(15.6) 高：2.8 高台：(9.4)	透明釉	精良	良好	ロクロ水引、ナデ	高台が高い鎬高器張様式
9次　北東側表土	第15図52	図版101	碗・輪花皿	口：16.0 高台：8.2 高：3.1	淡乳緑色釉	精良	良好	ロクロ水引	口縁部の一部に褐釉がかかる 見込に青・緑の井桁文
9次　8トレンチ	第15図53	図版93	碗・皿	口：— 高台：(5.6) 高：(2.2)	灰白色釉	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	ロクロ水引	見込に蛇ノ目釉剥ぎ
9次　南西側表土	第15図54	図版101	碗・角皿	口：8.2 高台：4.2 高：2.2	透明釉	精良	良好	ロクロ水引 ナデ	見込に唐草文 口縁角部は輪花状
9次　1トレ カマド掘土	第15図55	図版91	碗・皿口	口：(7.2) 高台：3.3 高：5.5	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	見込に梅花文 内面口縁部に斜格子文をめぐらせる 外面に松を描く
9次　南西側表土	第15図56	図版101	碗・皿口	口：— 高台：6.0 高：(5.1)	透明釉	精良	良好	ロクロ水引	高台は蛇ノ目釉剥ぎ 砂目痕 外面に竹が描かれる
9次　1トレ カマド掘土	第15図57	図版91	碗・筒利	口：2.4 高台：(4.8) 高：(14.2)	透明釉 褐釉 白色釉	精良	良好	ロクロ水引	同一個体であるが接合しなかったもの 口縁部から体胴上半まで草花文 体部下半は褐釉
5・6次　5号胞衣埋納遺構	第15図58	図版62	土・鍋	口：14.6～15.0 高：2.4	内面：赤褐(5YR4/8) 外面：橙(5YR6/6)	1mm以下の砂粒を少し含む	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	外面は風化により調整不明瞭
5・6次　5号胞衣埋納遺構	第15図59	図版62	土・鍋	口：12.9 底：12.6 高：11.1	内面：赤褐(5YR4/8) 外面：にぶい赤褐(5YR5/4)	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	回転ナデ	内面底部に有機付着物（胎盤か）
6次　5号胞衣埋納遺構	第15図60	図版62	土・皿	口：(7.4) 高：1.2	橙(7.5YR7/6)	精良	良好	回転ナデ 糸切り	胞衣壺との関係不明
6次　1号溝	第15図61	図版—	土・皿	口：(7.2) 底：(5.0) 高：1.4	内外：にぶい黄橙(10YR6/4)	精良	良好	回転ナデ 糸切	灯明皿か

第4章　まとめ

旧松崎旅籠油屋の来歴および建築構造の変遷については、『旧松崎旅籠油屋』（佐藤2008）に詳しい。その中で述べられた油屋の年代観および疑問点についてまとめると、次のとおりである。

1．油屋の年代観については、床板は角釘で止められ、出窓を支える持ち送りの絵様は、簡素ながら彫りは深く、18世紀末期の様式を示している。ただし、油屋には座敷飾りを備えた続き間の本格的座敷を持たない点、１階、２階ともに隣家（中油屋）が軒を接する北側に開口部を設ける点、１階の内法と天井の高さが高い点が疑問点として挙げられている。

2．中油屋は、表側の下屋庇を支える持ち送りは、両端部のみ当初のもので、絵葉は19世紀中期の様式を示している。ただし、竿縁天井で、長押は打たず、座敷飾りも簡素であるが、竿縁を面皮付き漆塗りとし、高い天井と相俟って全体に品格の感じられる造作となっており、18世紀後期に遡る意匠を示している。

3．中油屋の中の間に縁側を設けて採光を取る点、式台構えを残し、床框の跡を残す点、細めの柱を用いている点が疑問点として挙げられる。

4．油屋北側側面の２階表寄りには、当初出窓が設けられ、１階表寄りにも縁側が設けられ、いずれも風雨による風化の跡が見られる。これから、先行して建てられた油屋の出窓を取り壊した上で中油屋が建てられたことになる。しかしながら、座敷周りや全体の経年感を見ると、明らかに中油屋のほうが古い。

この問題について、宮本教授は、中油屋の式台構えからの３室が油屋の角座敷に相当するもので、この角座敷を中油屋が分家した際に主屋から独立させ、表側を増築したものと指摘した。この分家の時期は、時代背景から明治初期と想定している。ただし、主屋と角座敷は構造的には独立しており、分棟型の構成で、谷に設けた低い屋根で両者を繋いだ形式を示し、内法高など異なる点も多々見られ、一体的な建築とは考えにくい。

先行して油屋が建てられ、角座敷のみを残して主屋を建替えたのが、現存する油屋と捉えている。角座敷の前面に前庭を隔てて塀を巡らし、門を構えたことから、主屋は一般客用の宿泊、賓客は角座敷に宿泊させたと見ている。

1．中油屋

これまでの調査によって、建物の建築学的変遷は、上記のように考えられている。しかしながら、5・6次調査で検出された胞衣埋納遺構は、中油屋の変遷過程に疑問を生じさせる。

まず、中油屋は、嘉永２年（1849）の創建であることが墨書により明らかとなった。また、建築学的所見および礎石配置、建築部材の痕跡から、前身建物は存在しないと考えられる。したがって、現在は、嘉永２年に上棟された３間からなる座敷として復原されている。しかし、１～４次調査で検出された造成面は、天明期（1780～1810）以前[※1]と考えられており、時期的な齟齬がある。

次に胞衣壺が中油屋床下部分に埋納されている点である。胞衣壺は人の出入りがある家の間口や土間に埋納されることが一般的であるが、中油屋においては、床板の下にあたる整地層を掘り込んで埋納されている。この整地層は硬くたたき締められており、本来は土間であった可能性が指摘できる。これら胞衣壺として使用された土瓶は、佐賀市冨泉院境内出土例と器形、色調ともに類似する。この土瓶は、

礫石経の埋納容器として使用されており、文化13年（1816）銘の石塔下に埋納されたものである。

胞衣埋納遺構、礎石配置から、建物規模は変わらないものの、中油屋の前身建物は、土間２間、奥の間１間であったと想定される。創建時期については不明ながら、18世紀後期に遡る意匠をもつことが指摘されている点、中油屋の造成面は天明期（1780 ～ 1810）以前と考えられている点から、18世紀後期が建築時期を示す可能性がある。ただし、出土遺物には17世紀代の陶磁器も多く含まれており、これらが混入品であるのか、前段階の建物を想定するべきか現段階ではその性格をつかむことはできない。今後の検討課題である。

２次調査の結果、中油屋の北側に便所が検出されている。便所の西側には、板材を使用した方形プラン浴槽の存在が想定されており、江戸期に遡る可能性が指摘されている。前述のとおり、土間には胞衣壺が埋納され、使用された土瓶は、類例から文化13年（1816）前後の所産と考えられる※２。中の間増築の時期は明らかでないが、４号胞衣壺が床下に埋納されていたことから、本来は土間となっていたのであろう。順次西側へと土間から部屋へと改築されたのではないだろうか。この時期は、４号胞衣壺埋納以降と考えられる。同形の１～３号、６号胞衣壺が土間に埋納されていることから、19世紀前半代の早い段階と考えられる。

嘉永２年（1849）には、３室の座敷として、門の増設が行われ、建物および屋根の改築が行われたのであろう。中油屋表側の持ち送りが19世紀中葉の絵葉を示すことと矛盾しない。油屋の出窓部分が撤去されたのはこの時期と考えられる。中油屋は前身建物が存在しないことが明らかとなっているが、東側から時代に合わせ順次改築を行っていた可能性が胞衣埋納遺構の存在から想定される。

２．油屋

次に、油屋の変遷について検討する。「油屋」の屋号をもつ建物の建築年代は、現段階では明らかとなっていない。「油屋」の文字が最初に認められるのは、文化５年（1808）の三原家文書「大福帳」である。１～４次の発掘調査により、油屋は天明期（1780 ～ 1810）以前に形成された２次床面、文化文政期～幕末期（1820 ～ 1860）の３次床面、幕末から明治初期の造成面である１次床面から構成されていることが明らかとなっている※1。

以上のことから、天明期（1780 ～ 1810）の段階に油屋の創建が行われたと考えられるが、発掘調査では、建物に関連する遺構は確認できず、建物規模、形状は不明である。しかしながら、油屋に使用されている持ち送りは、18世紀末期の意匠を示している。別の建物で使用されていた再利用品という可能性はあるが、創建当時の部材である可能性は十分考えられよう。19世紀初頭には、持ち送りをもつ「油屋」と呼ばれる前身建物が存在したと考えられる。

２度目の造成は文化文政～幕末期（1820 ～ 1860）に行われた。前述のように、中油屋は、前身建物が存在しないこと、施主である油屋喜平によって嘉永２年（1849）に上棟されたことが墨書によって明らかとなっている。この時期は、中油屋の下屋庇の持ち送り様式から推定される19世紀中期と合致している。つまり、中油屋が格式の高い離れ座敷として改築された同時期に、油屋でも造成が行なわれている。中油屋と油屋の敷地高さを合わせ、一体性をもたせた「油屋」が造られたことを示唆している。これに伴い、中油屋の屋根は西側へ延びたため、油屋北西側出窓に干渉することとなる。油屋解体調査の際に、油屋北側出窓が撤去されたことが明らかとなっており、この段階のものであろう。中油屋が新築

されたものであれば、油屋主屋とは干渉しないよう造作されるはずである。このことは、油屋に付属していた離れ座敷を中油屋として増築したため発生した問題と考えられる。

３次調査で検出されたクド部屋は、カマド焚口手前の掘り込みから化政～幕末期（1820 ～ 1860）にかけての陶磁器が多く出土している。この頃には、油屋主屋南側にクド部屋、味噌部屋、馬小屋が造作された可能性がある。

３度目は幕末から明治初期である。この造成面は中油屋では確認されていないことから、油屋主屋のみの改修が行なわれたと考えられる。平成28年度に行なわれた解体調査によって、１階土間と厨房の仕切り壁にある胴差から墨書が見つかり、それに書かれた「文久元」年（1861）頃に現在残る主屋の建築が始まったものと考えられる。この柱は、建替え時に組まれた可能性が高いものの、修繕での組み込みも可能である。また、２階濡縁を支える持送りには、「文久四子」年（1865）、大階段吹き抜け天井の竿縁上端には「慶應元丑年」（1865）の墨書があることから、文久元年頃に建築が始まり、慶応元年頃には２階造作が完成していたものと考えられる。

３・４次調査で確認された味噌部屋と馬小屋の建て替え時に、クド部屋が建替えられていない点は注目される。９次調査で検出されたカマド跡は、屋外から屋内へとカマドを移設したのであろうか。

疑問となるのが、上述した中油屋増築に伴う油屋北側出窓の撤去である。嘉永２年（1849）の中油屋建築時に撤去されたであろう北側出窓痕跡が、文久年間（1861 ～ 1865）の油屋建築を経て、現在の油屋に残っている。このことは、文久年間の建築が大規模な修繕もしくは改修であり、18世紀末の絵様を示す持ち送りも当初の建築部材で、油屋の創建時期を示しており、後世に改修や増築を繰り返しながらも創建当初の姿を留めていたのではないかと考えられる。

明治期以降も油屋、中油屋は増改築を繰り返している。中油屋では、座敷部の土壁の下地から、貫伏として使用された明治12年（1879）の宿帳が見つかった。また、増築部には和釘が使用されており、打ち替え痕跡も見られないことから、明治中期頃までに建てられたことがわかる。２階桁には扨首を差し込んだ仕口があることから、当初は茅葺の寄棟造りであることがわかった。

大正12年（1923）には、離れ座敷「大正屋敷」が建築された。敷地内に存在する多くの施設が、この大正屋敷建築時に整備されたものと考えられる。大正屋敷が建築された際には、中庭を挟んだ南側にも幅（2.1m）の渡廊下が造られている。主屋から風呂、便所を結ぶ渡廊下は、半間幅である。渡廊下の北側は壁になっており、渡廊下から中油屋や裏庭を覗くことはできなかったそうである。

主屋と大正屋敷の間にはレンガ・モルタル造りの五右衛門風呂がある。風呂の焚口は大正屋敷への渡廊下の下を潜って到達する。焚口の熱は、風呂釜を経由して北側の煙突に抜ける。この構造から、実際には蒸風呂のような使用方法であったと推定される。風呂の水は、南西にある井戸から竹樋を使って汲み入れたそうである。この井戸は、南北2m、東西2.2mの範囲を排水溝に囲まれている。精査は行っていないが、直径1m程度の円形プランを呈すると考えられる。排水溝はモルタル造りで、部分的に切り石を使用している。排水は、３次調査で検出されたタメマスへと集約される。４次調査で検出された排水管は、大正屋敷に接続するものと考えられる。大正屋敷建築段階で設置されたものと考えられる。調査区の西壁沿いから地山を掘り込んだカマドが検出された。

油屋の東側縁先には、枯山水をもつ庭園の存在が指摘されている。この庭はモルタル仕上げであり、その作庭は明治期以降、大正12年完成の大正屋敷と同時期の整備と考えられる。この時期は小都におけ

る庭園文化の初現期にあたる。大正10年頃に小郡の旧笹渕家住宅、大正12年頃には干潟の松岡家住宅庭園、昭和３年頃の平田家住宅※３や昭和初期の河原氏庭園など、大正末期から昭和前期にかけて庭園が作庭されている。また、現在は失われているが、油屋の東側に存在した旧三原氏本家及び旧三原氏分家の庭園など、いずれも鳥栖市の作庭家松尾仙六によるものと伝えられている。油屋庭園は失われており、その意匠は不明であるが、小郡における庭園文化との関わりも注目される。

油屋で旅籠を営んだ池田喜久次は、昭和12年（1937）に没したが、その後、油屋は大刀洗航空基地技能者養成所の独身寮、終戦時は帰国を待つ朝鮮人家族寮、戦後は芝居小屋、食堂、電気店として利用されてきた。昭和24年（1949）撮影の航空写真には、茅葺屋根の姿が見られるが、昭和36年撮影の航空写真では、切妻の瓦葺きに変わっている。

油屋・中油屋の変遷をまとめると次のようになる。

1．天明期（1780 ～ 1810）以前・18世紀後期

油屋及び中油屋創建。

2．18世紀末～ 19世紀初頭頃か

離れ座敷に廊下と便所を増築。（この頃４号胞衣壺埋納か）

3．文化年間頃・19世紀前期

土間（現在の中の間）を部屋に改築（１～３号、６号胞衣壺埋納、５号胞衣壺埋納）

4．嘉永２年（1849）

中油屋の造成、油屋と高さを揃える。３間からなる中油屋に改築。干渉する油屋の北側出窓を撤去。油屋主屋南側にクド部屋、味噌部屋、馬小屋を造作。

5．文久元年から慶應元年（1861 ～ 1865）

油屋の改築。味噌小屋、馬小屋を改築。

6．明治12年～中頃

中油屋の増築。建具を壁に変更。

7．大正12年

大正屋敷を創建。敷地内を整備。庭園を作庭。

8．昭和10年

油屋廃業。

9．昭和24 ～ 36年

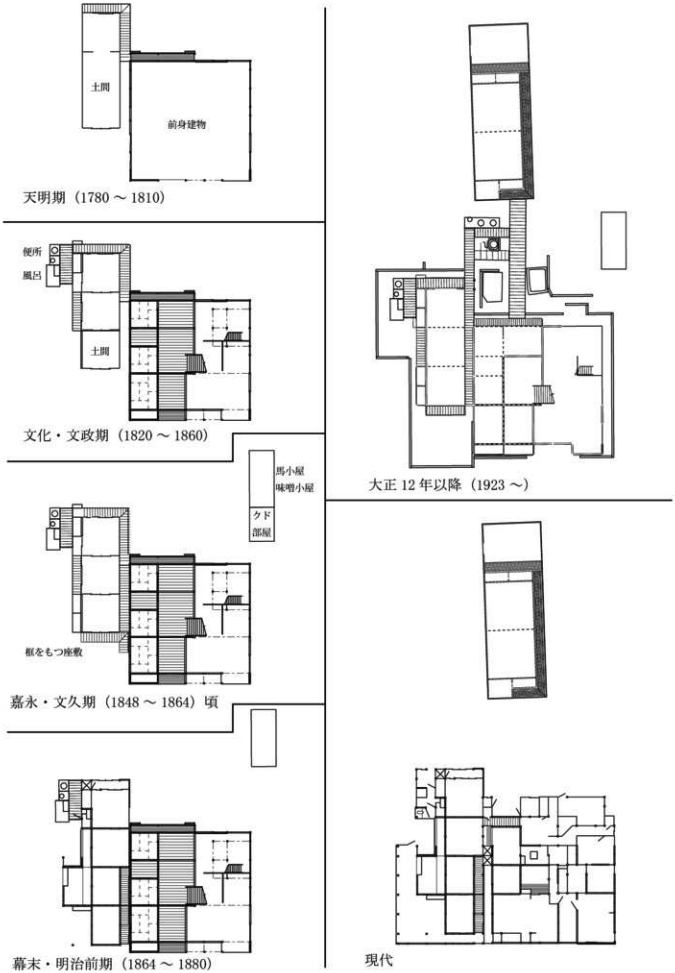
屋根を瓦葺に変更。

※１　佐藤雄史　2008「旧松崎旅籠油屋」（小郡市文化財調査報告書第234集）

※２　時期と床面の次数は佐藤2008のままとした。

※２　志佐憚彦　1982「佐賀県下の礫石経について」『佐賀県立博物館調査研究書』8

※３　龍孝明　2017「平田氏庭園」（小郡市文化財調査報告書第308集）


土間
前身建物
天明期（1780 ～ 1810）
便所
風呂
土間
文化・文政期（1820 ～ 1860）
馬小屋
味噌小屋
クド
部屋
枢をもつ座敷
嘉永・文久期（1848 ～ 1864）頃
幕末・明治前期（1864 ～ 1880）
大正 12 年以降（1923 ～）
現代

第 18 図　油屋変遷図

図　版

１．５次調査区全景

２．１号胞衣壺出土状況

３．２号胞衣壺出土状況

４．３号胞衣壺出土状況

５．６次調査区全景

６．６次調査区門付近礎石

図版２

１．４号胞衣壺出土状況

２．５号胞衣壺出土状況

３．７次調査区北側な列

３．７次調査区北側な列

５．７次調査区門礎石

６．７次調査区東布石

１．９次調査区全景（西から）

２．油屋９次調査区全景（東から）

図版４

１．油屋９次　１トレンチ

２．油屋９次　７トレンチ

３．油屋９次　７トレンチ

４．油屋９次　８トレンチ

５．油屋９次　９トレンチ

６．油屋9次　ろ列

1．油屋９次　か十六付近雨落

2．油屋９次　へ十四

3．油屋９次　ち七

4．油屋９次　ち七礎石地形

5．油屋９次　又に十

6．油屋９次　又に十礎石地形

図版6

1．油屋5次　4号胞衣壺

2．油屋6次　5号胞衣壺

１．油屋６次　６号胞衣壺

２．油屋６次　１・７・10～12号土坑

３．油屋６次　１トレンチ

４．油屋６次　床下掘下生活面直下

５．油屋６次　床下確認面直上

６．油屋６次　床下確認面直上

図版8　出土遺物

1．油屋6次　床下客土層中

2．油屋6次　床下客土層中

3．油屋7次　ピット

4．油屋7次　ピット

5．油屋7次　表土

6．油屋9次　ち七

1．油屋９次　１トレンチ

2．油屋９次　７トレンチ

3．油屋９次　８トレンチ

3．油屋９次　８トレンチ

5．油屋９次　へ十四

6．油屋９次　へ十四

図版 10　出土遺物

1．油屋９次　表土

2．油屋　２階縁切板目貼下

3．油屋　２階縁切板目貼下

報 告 書 抄 録

ふりがな	きゅうまつざきはたごあぶらや２
書名	旧松崎旅籠油屋２
副書名	
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第317集
編著者名	龍孝明
編集機関	小郡市教育委員会
所在地	〒838-0198　福岡県小郡市小郡255-１　℡0942-72-2111
発行年月日	2018（平成30）年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
きゅうまつざきはたごあぶらや２ 旧松崎旅籠油屋 ５次調査（試掘）	おごおりしまつざき 福岡県小郡市松崎	40216		33° 25′ 25″	130° 33′ 46″	2009. 05. 28 ～ 2009. 06. 09	6㎡	浄化槽設置 （試掘）
きゅうまつざきはたごあぶらや 旧松崎旅籠油屋 ５次調査						2012. 12. 19 ～ 2013. 01. 08	10㎡	遺跡整備
きゅうまつざきはたごあぶらや 旧松崎旅籠油屋 ６次調査						2013. 10. 16 ～ 2014. 01. 20	70㎡	遺跡整備
きゅうまつざきはたごあぶらや 旧松崎旅籠油屋 ７次調査						2013. 09. 26 ～ 2014. 10. 14	10㎡	遺跡整備
きゅうまつざきはたごあぶらや 旧松崎旅籠油屋 ８次調査						2015. 12. 17 ～ 2015. 12. 18	3㎡	遺跡整備 （試掘）
きゅうまつざきはたごあぶらや 旧松崎旅籠油屋 ９次調査						2016. 04. 18 ～ 2017. 02. 15	200㎡	遺跡整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
旧松崎旅籠油屋２	近世旅籠	近世 近代 現代	土坑、溝	陶磁器・瓦	小郡市有形文化財

要約	5次調査（試掘）では、土坑1基、ピット2基、3次調査で確認されたタメマスの続きを検出した。続く5・6・7次調査では中油屋の調査を実施し、検出された礎石から中油屋の建物規模が明らかとなったほか、門扉の存在が明らかとなった。8・9調査では油屋の調査を実施、カマドの一部が検出された。礎石から当初建物の復原を行っている。

旧松崎旅籠油屋２

小郡市文化財調査報告書　第317集

2018年3月30日

発行　小郡市教育委員会

福岡県小郡市小郡255-1

出版　片山印刷有限会社

福岡県小郡市祇園1-8-15